

聖武天皇即位
1300 年記念
奈良県文化施設
連携企画

資料展示

聖武天皇



▲東大寺供養会
大正 4 年(1915)

▲『続日本紀』『大和名所図会』『庁中漫録』

令和 6 年

11/1 **金** ▶ 12/27 **金**

【開館時間】 9:00～20:00

【休 館 日】 毎週 月曜日 (11/4 は開館)
※11/5 (火)、11/29 (金)は休館

【展示場所】 3 階ブリッジ



▲南都大仏殿勸進帳
元禄 5 年(1692)

ごあいさつ

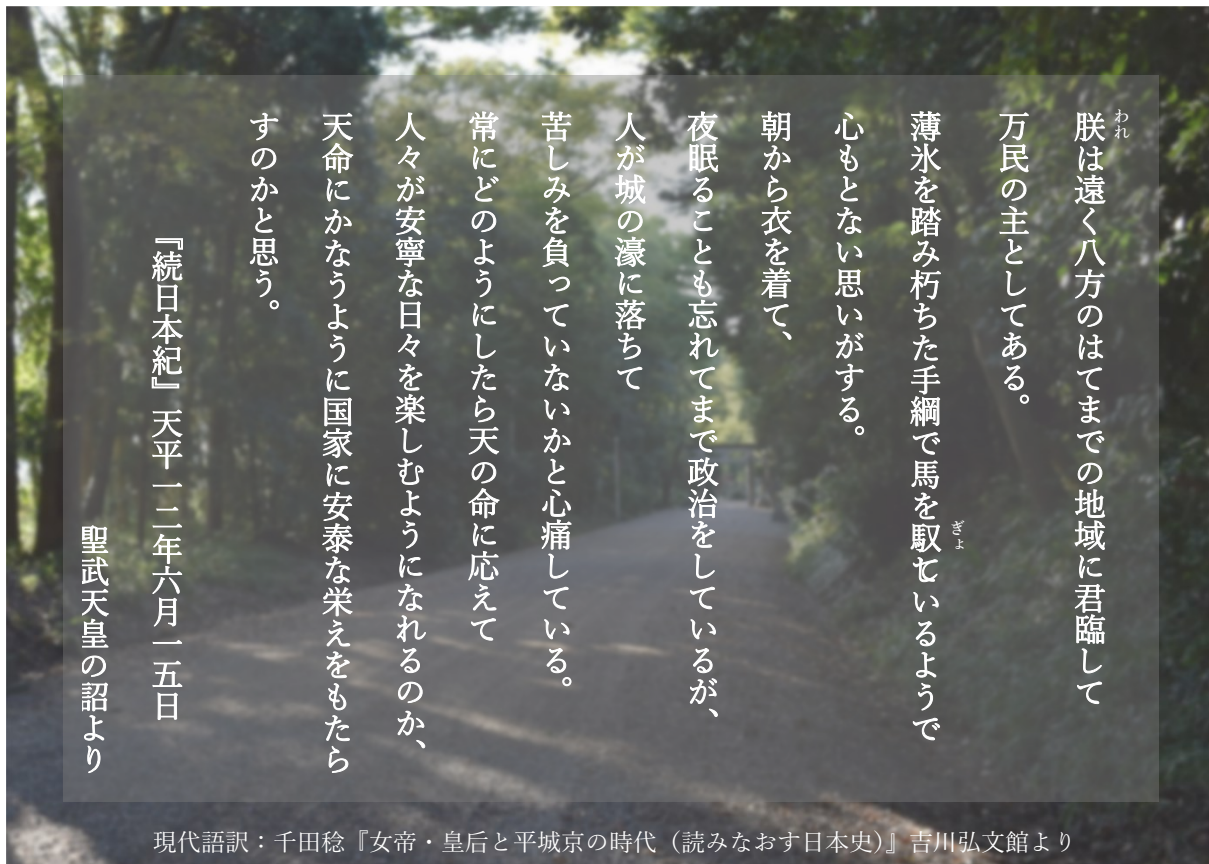
二度の戦火で焼失するも復興し、守り伝えられてきた東大寺の大仏と大仏殿。

田畑となっていた平城宮跡は保存運動により史跡として指定され、現在は復原された大極殿と朱雀門がそびえています。

毎年多くの方が奈良を訪れる正倉院展。正倉院の宝物は聖武天皇の遺愛の品を光明皇后が奉獻したことにはじまります。

聖武天皇が遺したものが、多くの人を惹きつける奈良の^{いしづえ}礎 となったと言っても過言ではないかもしれません。しかし、聖武天皇のことをどれほど知っているでしょうか。

即位から 1300 年を迎える今年、当館所蔵の資料で聖武天皇の足跡を辿りたいと思います。どのような時代に生き、どのような人生を送ったのか。そして聖武天皇が遺したものを後世の人たちが守り伝えてきた歴史についてもご紹介させていただきます。



本展開催にあたり、宮内庁正倉院事務所、奈良文化財研究所から貴重な写真をご提供いただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。



マークがついている史料は、当館 HP のまほろばデジタルライブラリーで画像を公開しています。

父は文武天皇、母は藤原宮子

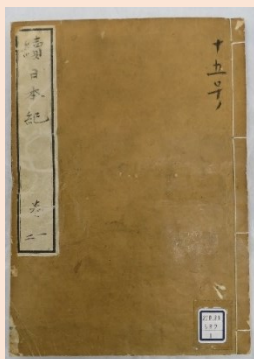
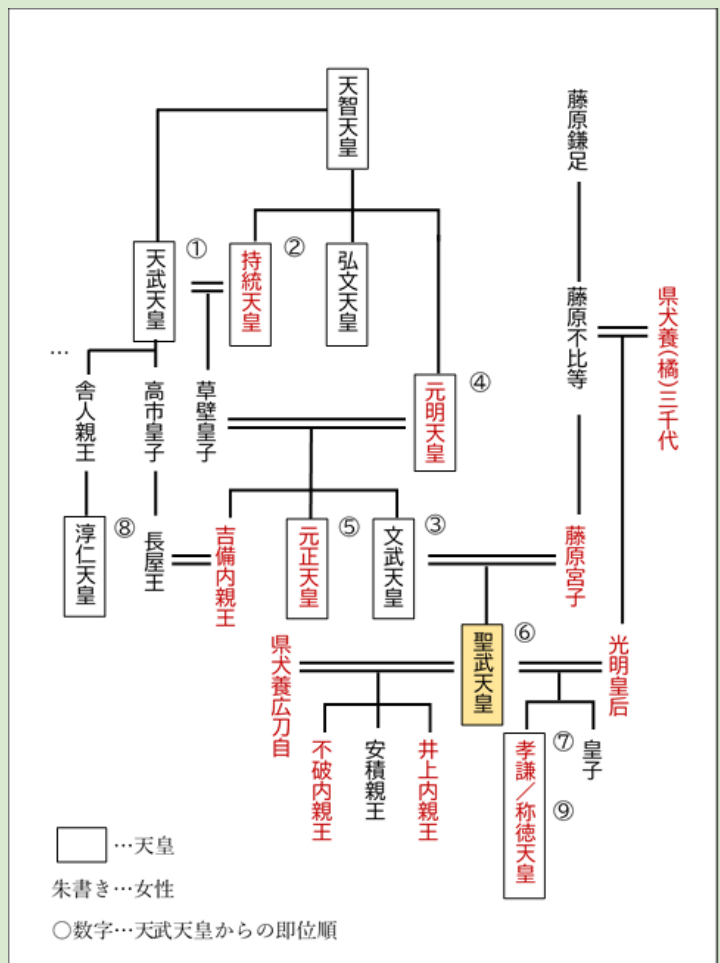
大宝元年（701）、文武天皇と藤原不比等の娘、宮子との間に皇子が誕生しました。諱は首、のちの聖武天皇です。誕生後すぐに、母は重い鬱となり、離れて暮らすことになります。7歳の時には父の文武天皇が25歳という若さで亡くなりました。

祖母、伯母の即位と平城京への遷都

この時代、幼帝の即位ということは考えられず、文武天皇のあとは首皇子の祖母で、草壁皇子の妃であった元明天皇が即位しました。和銅3年（710）、元明天皇は都を平城京へと遷し、和銅7年（714）に14歳の首皇子を皇太子に立て、その翌年には天皇の位を文武天皇の姉、元正天皇に譲りました。

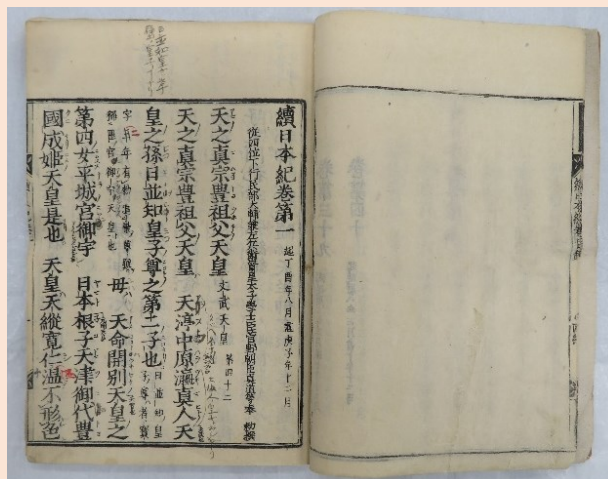
※年齢は数え年

聖武天皇関係の系譜



『続日本紀』

明暦3年(1657)跋



『日本書紀』に続く勅撰の歴史書です。文武天皇から桓武天皇までの95年間の記事を収め、奈良時代を中心とする時期の基本史料です。



聖武天皇の即位

神亀元年（724）2月4日、聖武天皇が24歳にして即位し、元号も養老から神亀と改められました。同日、皇族のひとりである長屋王が左大臣に昇進。不比等の息子、武智麻呂以下の兄弟たちとともに、聖武天皇を支えていくことになります。すでに養老4年（720）には藤原不比等が、翌年には祖母の元明上皇が亡くなっていました。

皇子の誕生

霊龜2年（716）6月、藤原不比等と県犬養三千代の娘、光明子（あすかべひめ安宿媛）が聖武天皇の妃となりました。後の光明皇后です。聖武天皇の母も不比等の娘であるため、2人は同い年の甥と叔母という関係です。養老2年（718）、光明子は阿倍内親王を出産しました。

神亀4年（727）9月29日、光明子が待望の男子を出産。聖武天皇は、この皇子を皇太子にすると宣言しました。この時代、幼児を皇太子にするのは異例のことです。

皇子の死

神亀5年（728）9月13日、誕生から1年を迎えることなく、皇太子は病気で亡くなります。聖武天皇の悲しみは深く、朝廷の政務が3日間停止しました。同年11月、聖武天皇は皇太子の菩提をとむらう山房の造営に着手します。やがてこれが金鐘寺（こんしゅう）となり、発展して東大寺へとつながっていきます。

即位 1300 年の今年 聖武天皇の大嘗祭に関わる 木簡が出土！

2024年3月、平城宮跡の発掘現場から聖武天皇の大嘗祭に関わる木簡が出土したと報道発表されました。

だいじょうさい 大嘗祭

天皇が新穀を神にお供えし、みずからもそれを食する新嘗祭という祭祀が毎年11月に行なわれます。特に天皇が即位してはじめての新嘗祭は大嘗祭と呼ばれ、皇位継承を顕示する意味でも重要な儀式です。



「大嘗分」と書かれた木簡

奈良文化財研究所提供

長屋王の変

皇太子の死から5ヶ月、神亀6年（729）2月10日、長屋王がひそかに左道（邪道、妖術）を学んで国家を傾けようとしているという密告を受け、藤原宇合（不比等の3男）らが邸宅を囲みました。2日後、長屋王と妻の吉備内親王、子の膳夫王らは自殺。長屋王と吉備内親王の遺骸は生駒山に埋葬されました。

光明子が皇后に

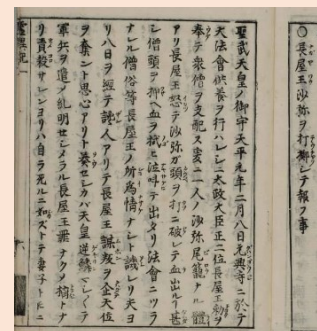
長屋王の変から半年後の8月5日、元号は天平と改められ、8月10日、光明子を皇后にするという詔が下されました。同月24日には官人らを内裏に呼び、光明子を皇后とする理由を宣命として述べられています。

長屋王はどんな人物だったのか

平安時代の初期に編まれた仏教説話集『日本霊異記』には、長屋王についての話が載っています。

元興寺の法会で長屋王が沙弥の頭を打って傷つけた。二日後、長屋王を妬む人が天皇に「長屋王が謀反を企んでいる」と事実を偽って告発。これにより長屋王は自ら命を絶つことになる。

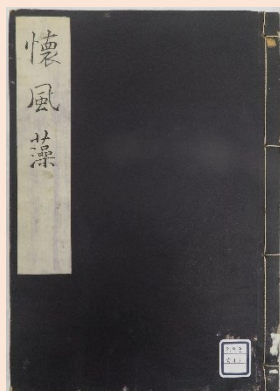
沙弥を打つという悪業の因果で無実の罪で死ぬことになるという話で、長屋王はやや傲慢な人物として描かれています。



『日本霊異記』

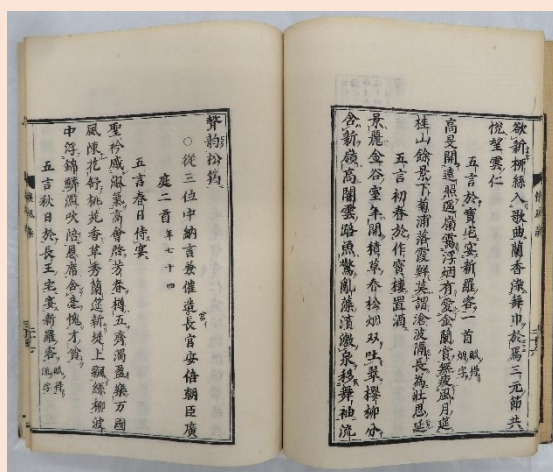
(国文学研究資料館所蔵)

出典：国書データベース



『懷風藻』

寛政5年(1793)



長屋王が別荘に外国使節を招き、送別の宴で詠んだ漢詩も収録されています。



疫病の大流行

天平7年(735)、大宰府管内で疫病による死者が多く出ました。この疫病は天然痘とも麻疹とも考えられています。8月、疫病を鎮めるため、神仏に祈祷し、疫病で苦しむ人に食糧と薬を与え、長門以東の国々には疫神の侵入を防ぐ祭り（道饗祭）を行なうよう命じています。

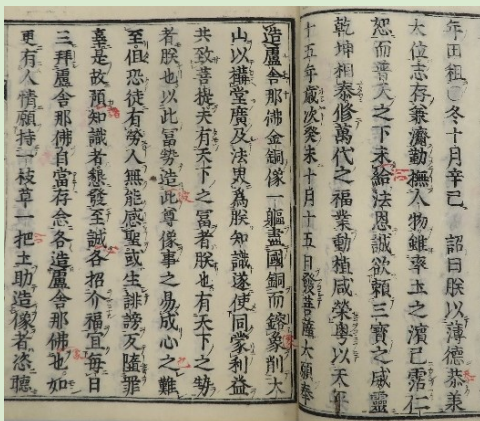
天平9年(737)になると、さらに疫病が大流行します。5月19日の詔では「4月以来、疫病と干魃が同時におこって、田の苗は枯れしぼんでしまった」として大赦などの対策を行なっています。6月1日には諸官司の官人が疫病にかかっているとして、朝廷での執務を取りやめています。この年、聖武天皇を支えてきた藤原四兄弟が疫病により亡くなりました。

阿倍内親王の立太子

年が明けた天平10年(738)正月13日、聖武天皇は娘、阿倍内親王を皇太子にしました。誕生から1年を迎えることなく亡くなった皇子の死からおよそ10年。未婚の女性が皇太子になることは前例のないものでした。

藤原広嗣の反乱

大宰府に左遷されていた藤原広嗣が天平12年(740)9月、反乱をおこします。広嗣は藤原四兄弟の1人、宇合の息子です。政治が原因で災異がおこっているとして、玄昉と吉備真備を政界から追放することを求めました。聖武天皇は大野東人を大將軍に任じ、およそ2万の軍を派遣。九州北部で両軍は激突します。10月23日に広嗣は捕らえられ、11月1日に処刑されました。



『続日本紀』明暦3年(1657)跋

【参考】

『続日本紀二(新日本古典文学大系)』岩波書店
『続日本紀(上) 全現代語訳』(講談社学術文庫)

(天平一五年一〇月二五日)

盧舎那大仏造立の詔(抜粋)
万代の福業を修めて
動植ことごとく栄えんとす
(万代までのすぐれた事業を成就させて、すべての動植物が栄えることを望む)
国中の銅を尽くして像を鑄造し、大きな山を削って仏堂をつくり、仏法を広めよう。そして最後には朕も衆生も皆同じように仏の功德を蒙り、共に仏道の悟りを開く境地に至ろう。
大きな富や権力で大仏を造るのはたやすいが、「一枝の草や一握りの土」を持って協力したいと申し出るものも一緒に、小さな力を集めて造ろう。国・郡などの役人は造仏のために人民を強制してはならない。

ほうこう

彷徨五年

まだ広嗣が捕らえられたという知らせが届いていない天平12年(740)の10月末、聖武天皇は突如、^{せきのひがし}関東行幸へと出発します。伊勢神宮に奉幣後、北上して美濃の不破頓宮へ。一転して琵琶湖岸を南下。12月15日に^{くに}恭仁宮にいたり、ここに遷都します。平城宮の大極殿も解体され、恭仁宮へと移築されました。しかし天平14年(742)には^{しがらき}紫香楽宮の造営がはじまり、天平16年(744)2月には難波宮を皇都と定めます。ところが聖武天皇は難波宮ではなく紫香楽宮に滞在。そして天平17年(745)5月、平城宮に還都が決定します。^{みやこ}京をどこに定めるか^{さまよ}彷徨った理由は、諸説ありますが、定かではありません。

国分寺建立、大仏造立

天平13年(741)3月、国分寺建立の詔により、全国に国分寺・尼寺の建立を命じます。そして天平15年(743)10月15日には、紫香楽の地で盧舎那大仏造立の詔が出されました。紫香楽の甲賀寺で大仏の骨柱が立てられ施工が進みましたが、天平17年(745)の平城遷都により東大寺で大仏が造立されることになりました。

唐僧 鑑真の来日

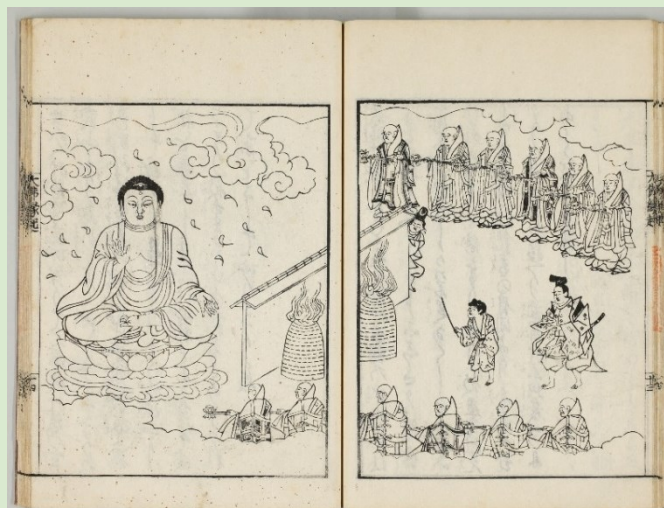
当時の日本の仏教界では、殺人を犯す僧侶が出るなど、戒律がしっかりと守られていないことが危惧されていました。そこで本格的な戒律、受戒の制度を整えるため、天平14年(742)遣唐使船に同乗した^{ようえい}栄叡と^{ふしょう}普照が唐で鑑真に会い、来日を要請。鑑真は12年間、5度の渡航に失敗しますが、6度目にしてようやく来日を果たしました。天平勝宝6年(754)のことです。



『東大寺大仏殿縁起』

崇憲(著)

[天明3年(1783)]



まほ
デジ



娘 孝謙天皇に讓位

天平勝宝元年（749）正月に聖武天皇は行基を師として受戒し出家します。同年 7 月 2 日に聖武天皇は讓位し、孝謙天皇が即位しました。

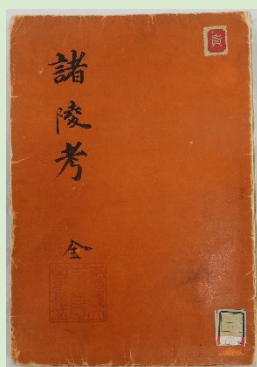
大仏開眼会

大仏鑄造は天平 19 年（747）から始まります。天平勝宝 4 年（752）4 月、大仏開眼会が執り行なわれました。開眼の筆を執ったのは天平 8 年（736）に來日したインドの僧、菩提僊那^{ぼだいせんな}。1 万人の僧を招き、皇族・官人・諸氏族による様々な歌舞も奉納され、盛大に行なわれたと『続日本紀』に記されています。

聖武天皇の崩御

天平勝宝 7 年（755）、聖武上皇は体調不良が続いていましたが、翌年の 2 月に難波宮へと行幸します。しかし体調が悪化。平城宮へと戻り、天平勝宝 8 年（756）5 月 2 日に亡くなりました。56 歳でした。同月 19 日には佐保山陵^{みささぎ}に葬られました。

聖武上皇の七七忌（四十九日）に光明皇太后は天皇遺愛の品や薬物を東大寺大仏に奉獻しました。これらの品々は正倉院に収蔵され保存されることになります。奉獻された際の目録（国家珍宝帳）には「生前聖武天皇が好んだ品をみると天皇の在りし日が思い出されて涙がこぼれる」と悲しみにくれる光明皇太后の胸の内に綴られています。



『諸陵考』

[安永 8 年(1779)
～文化 14 年(1817)]



江戸時代、幕府からの指示で奈良奉行所が天皇陵の調査や整備を行ないました。この史料はその際に作られた図の写しです。

まほ
デジ



大仏殿の炎上

治承 4 年 (1180) ^{たいらのしげひら} 平 重衡によって大仏と大仏殿は焼失しました。しかし東大寺の僧、俊乗房 ^{ちようげん} 重源によって再建されます。ところが永禄 10 年 (1567)、松永久秀と三好三人衆との戦いで再び大仏殿は焼失。大仏は原形を留めないほどに溶け崩れました。その後、山辺郡山田城主の山田道安が大仏を修復。仮堂も建てられましたが、慶長 15 年 (1610) の大風で仮堂も倒壊。大仏は屋根もなく風雨にさらされることになりました。

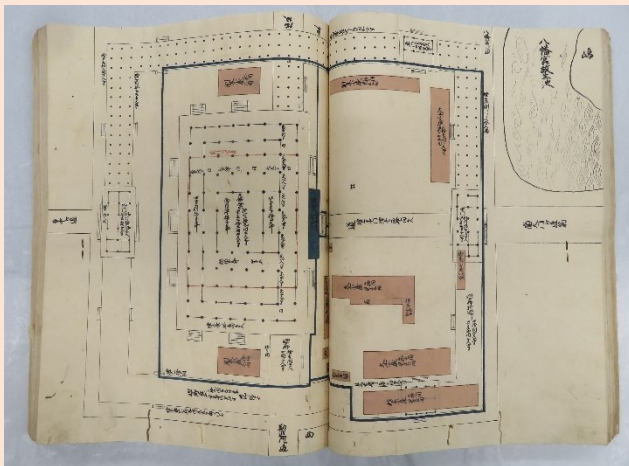
公慶上人の勧進活動

貞享元年 (1684)、東大寺の公慶上人 ^{こうけい} は大仏修復 ^{かんじん} の勧進をはじめます。各地に出向き、多くの寄進を集め、衆人の助力で大仏修復を成し遂げました。元禄 5 年 (1692) の開眼供養は 31 日間行なわれ、20 万人以上の人々が参詣に訪れました。

続く大仏殿の再建は大仏修復の 10 倍以上の経費がかかる難事業でした。各地で勧進活動を行ない、将軍家や幕府とも掛け合います。それでも再建費用にはほど遠く、規模を縮小して再建することになります。宝永 2 年 (1705)、ようやく大仏殿の上棟式が行なわれ、このお礼のために公慶上人は江戸へと向かい、その地で亡くなりました。

50 年に及ぶ復興事業

公慶上人の弟子、公盛が再建を引継ぎ、宝永 5 年 (1708) に大仏殿は完成します。続いて中門と廻廊の再建のため公盛は勧進の日々を続けます。享保元年 (1716) に中門が落慶。享保 9 年 (1724) に廻廊の完成を見ることなく公盛は亡くなりました。そののち公俊、庸訓と事業は引き継がれ、廻廊が完成したのは元文 2 年 (1737) のことです。公慶上人が大仏修復の勧進をはじめてからおよそ 50 年が経っていました。



和州志 [大佛殿欽始次第日録]

(「庁中漫録」43 大佛殿再建記[1])

[江戸時代]

玉井定時が記した「庁中漫録」におさめられた大仏殿再建の記録です。再建の詳細な様子が記された貴重な史料です。大仏殿は創建時、11 間×7 間の建物でしたが、江戸時代の再建では 7 間×7 間の建物に縮小されました。図の朱線で囲まれた範囲が江戸時代の再建の規模です。

正倉院を訪れた人々

藤原道長や鳥羽上皇、後白河上皇、足利将軍など時の権力者が正倉院を訪れ宝物を拝観しました。織田信長が蘭奢待（宝物名は黄熟香）を切り取り拝領した話は有名です。徳川家康も宝庫を開封しますが、蘭奢待を切り取ることはせず、宝庫を修理し、宝物保管用の長持を寄進しました。

元禄の開封

当館所蔵の「御開封記」（庁中漫録 45）は元禄の宝庫開封に立ち会った奈良奉行所の与力、玉井定時による記録です。元禄2年（1689）、東大寺別当から正倉院修復の訴えがあり、玉井定時らが宝庫の破損箇所を調べ報告しました。これをもとに元禄6年（1693）5月16日に開封。宝物の点検と宝庫の修理が行なわれました。

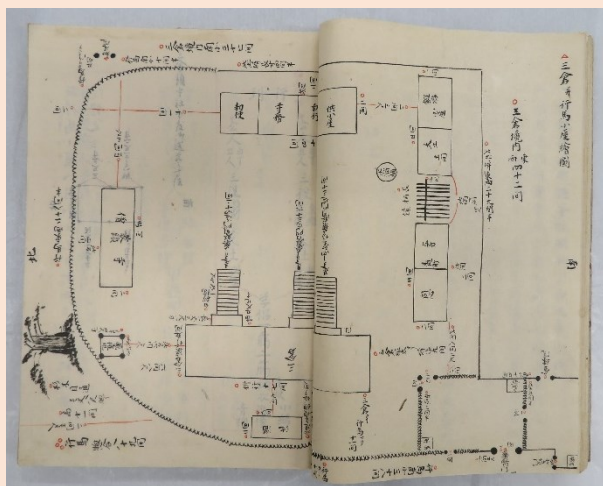
元禄の開封に立ち会った 玉井定時

玉井定時は正保3年（1646）、奈良奉行所の与力、伊関六太夫の子として生まれました。成人後、大和郡山藩の藩士として本多家に仕えていましたが、お家騒動により、本多家は福島に転封。定時は大和に残り、延宝8年（1680）に奈良奉行所の与力になりました。

定時とその子孫は通称「庁中漫録」と呼ばれる70冊以上の記録を編みました。定時が職務として立ち会った大仏・大仏殿の再建や正倉院の開封、春日社の造替の詳細な記録に加え、法度や大和の地誌など、内容も多彩です。



玉井定時



御開封記〔東大寺正倉院〕

（「庁中漫録」45）

〔江戸時代〕

正倉院宝庫の開封は天皇の許可が必要な勅封です。開封の際は厳粛な儀礼を踏んで行なわれます。元禄の開封に立ち会った奈良奉行所の与力、玉井定時は、儀礼の様子を文と図で記録しました。



奈良博覧会

明治 8 年（1875）4 月から 6 月までの 80 日間、東大寺の大仏殿と廻廊を会場に第一次奈良博覧会が開催されました。寺院の仏像や旧家が所蔵する什宝のほかに、正倉院宝物が展示され、17 万人もの人が観覧しました。奈良博覧会は明治 27 年（1894）の第 18 次まで行なわれ、4 度、正倉院の宝物が出陳されました。

正倉院展

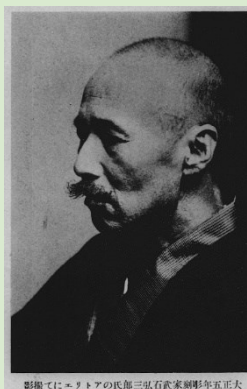
終戦の 1 年後、昭和 21 年（1946）10 月、第 1 回の正倉院展が奈良帝室博物館※で開催されました。戦争で疲弊した国民にかつての日本文化の素晴らしさにふれて元気になってほしいとの願いがあったようです。わずか 20 日の期間に約 15 万人もの人が訪れたといえます。以後、毎年開催されるようになり、今年で 76 回目を迎えます。

※現在の奈良国立博物館。同館での開催は今年で 76 回目（東京国立博物館で 3 回開催）。

森鷗外も立ち会った 正倉院の開封

明治の文豪、森鷗外も正倉院の開封に立ち会っています。大正 6 年（1917）、鷗外は東京・京都・奈良にあった帝室博物館の総括責任者（総長）に任じられます。帝室博物館総長の仕事のひとつが正倉院の曝涼※に立ち会うことでした。奈良出張中に滞在した官舎の門が「鷗外の門」として今も残っています。

※曝涼：宝物の点検と庫内の清掃などを行なう

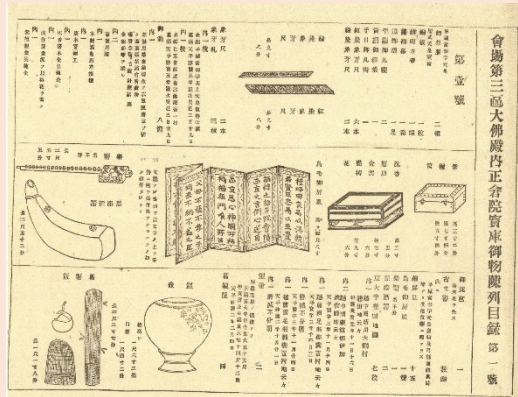
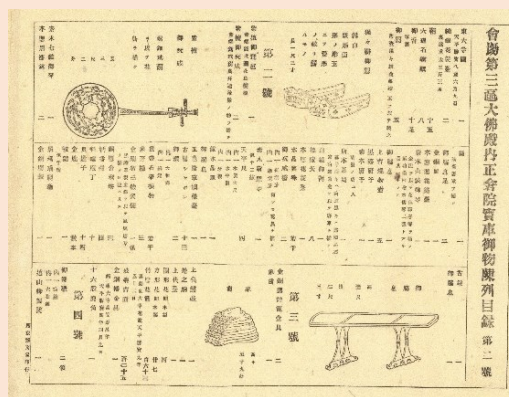


影撮にてヘリタアの民部三郎石武家撮影年五正大

森鷗外

出典：国立国会図書館
「近代日本人の肖像」

たかな
勅封の笥の皮切りほどく
剪刀の音の寒きあかつき
「奈良五十首」
開封の日、奈良の冬の朝に、正倉院の
勅封を解くはさみの音が響く様子を歌
っている。



奈良博覧会物品目録 [明治 8 年] 明治 8 年(1875)

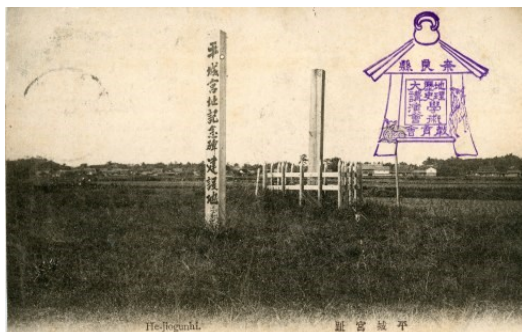
まほ
デジ



平城宮跡の保存

平城宮跡は都が京都に遷ったあとは田畑となっていました。宮跡の保存運動は明治34年（1901）に地元の人たちが標木を立てたことにはじまります。その後、奈良の植木商、棚田嘉十郎が保存運動を強力に進め、大正2年（1913）には東京で「奈良大極殿趾保存会」が設立。大正11年（1922）、平城宮跡が史跡に指定されました。

戦後になると、昭和36（1961）年の近畿日本鉄道の検車庫建設計画、昭和39年（1964）の国道24号線バイパス建設計画で遺跡破壊の危機に直面しますが、全国的な保存運動が展開され、平城宮跡は守られてきました。



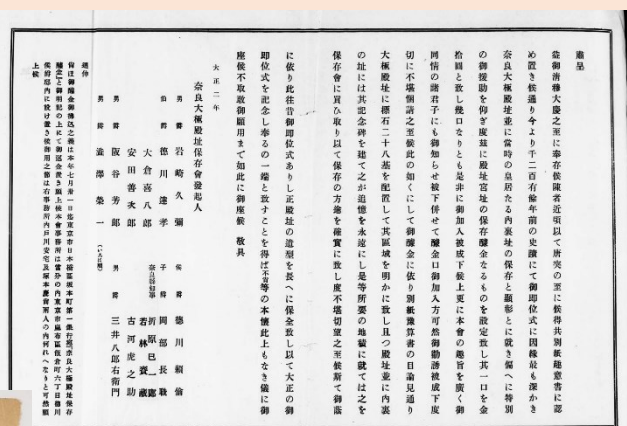
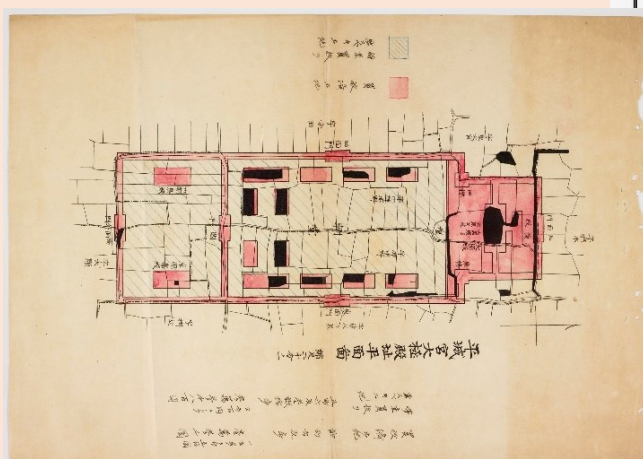
絵はがき

平城宮跡の大極殿土壇上の写真。
奥に見える標木が明治34年、手前が明治43年に立てられたもの。

平城宮跡関係文書（奈良県庁文書）

大正2～10年（1913～1921）

大正2年（1913）、東京で奈良大極殿趾保存会が発足します。会長は紀州徳川家の当主徳川頼倫。発起人には渋沢栄一も名を列ねています。



◀ 当初は、赤塗り部分の大極殿や朝堂院の建物と周りを囲む歩廊だけを公有地化する計画でした。しかし、朝堂院内の私有地も買収し、全体を保存する方針へと変わります。



まほ
デジ

【解説の主な参考文献】

- ・寺崎保広『聖武天皇：帝王としての自覚と苦悩（日本史リブレット人:007）』山川出版、2020 年
- ・佐藤信編『奈良の都（古代の人物:2）』清文堂出版、2016 年
- ・坂上康俊『平城京の時代（シリーズ日本古代史:4）』岩波新書、2011 年
- ・千田稔『女帝・皇后と平城京の時代（読みなおす日本史）』吉川弘文館、2024 年
- ・外池昇『検証天皇陵』山川出版社、2016 年
- ・青木和夫[ほか]校注『続日本紀 2（新日本古典文学大系:13）』岩波書店、1990 年
- ・宇治谷孟『続日本紀（上）全現代語訳』講談社学術文庫、1992 年
- ・宇治谷孟『続日本紀（中）全現代語訳』講談社学術文庫、1992 年
- ・出雲路修校注『日本霊異記（新日本古典文学大系:30）』岩波書店、1996 年
- ・筒井寛昭, 梶谷亮治, 坂東俊彦『もっと知りたい東大寺の歴史』東京美術、2010 年
- ・西山厚『仏像に会う：53 の仏像の写真と物語』ウェッジ、2020 年
- ・奈良国立博物館『東大寺公慶上人：江戸時代の大仏復興と奈良：特別展』2005 年
- ・島津良子, 坂東俊彦「玉井家蔵「大仏殿再建記」解説および史料翻刻」第 1 回～5 回
『南都佛教』第 86、88、89、92、93 号、2005 年～2009 年
- ・森郁夫『東大寺の瓦工（臨川選書）』臨川書店、1994 年
- ・西川明彦『正倉院のしごと：宝物を守り伝える舞台裏』中公新書、2023 年
- ・東野治之『正倉院』岩波新書、1988 年
- ・奈良国立博物館『正倉院展 令和四年(第 74 回)』2022 年
- ・平山城児『鷗外「奈良五十首」を読む』中公文庫、2015 年
- ・山上豊「近代奈良の観光と奈良博覧大会-奈良県行政文書等を通して-」『地域創造学研究』第 18 号
奈良県立大学研究会、2013 年 3 月
- ・国立文化財機構奈良文化財研究所『未来につなぐ平城宮跡-保存運動のあけぼの-（平城宮跡資料館
令和四年度春期特別展:平城宮跡史跡指定一〇〇周年記念・奈良文化財研究所七〇周年記念）』2022 年
- ・千田稔監修/奈良県編『奈良公園の案内書：極』角川アスキー総合研究所、2024 年